



る/自由で目的のない活動としての P4C を擁護する陣営との対立点を明らかにした。本章では、子どもの実存に触れ、厳密な探究からはこぼれ落ちてしまうような個々のユニークな観点や複数性を担保するために、ある程度後者の議論や方法を取り入れていく必要性について論じた。他方で、こうした点に配慮しつつも、P4C においてはあくまで「一つの判断」という成果を目的として探究を行うほかないことも明らかとなった。こうした点を論じるにあたって、本章は、後者の議論において想定されるピースタによる「主体-性」の概念が、P4C においては「薄い主体-性」として捉えられるべきであることを結論付けた点で、独自の研究成果がある。

第 2 章では、P4C における教師の役割と権威性について検討した。本章では、ある程度の哲学的な素養を背景とした教師が、P4C においては哲学的な議論の方向性を保つことを重要な役割とする一方で、そこでは教師と子どもの非対称性が生じることについて論じた。そこでは、教師の役割を可能な限り薄めることで、フラットな関係性と他者の現前を志向するヴァンシールガムらの理論を検討したが、本研究では、それが子どもを混乱させることによって成立する過大要求的な側面を含むことも明らかにした。従って、哲学的な問いの答えは誰も知らないという無知の事実、P4C においてはどの参加者の発言がコミュニティの変容の引き金になるかはわからないという権威の曖昧さ、教師の役割は最終的に参加者全員の中に内在化されるべき=食い殺されるべき存在という 3 点から、この問題にアプローチすべきであることを提案し、その際には、“p4c Hawaii”のコミュニティ・ボールが有効に機能することを結論付けた。それにより、教師（や特定参加者）の権威性は、消失、回避、解消されるのではなく、薄められ、分散されることができる。さらに、「呼びかけ」の実存的契機も、ボールによって視覚化され身体的に実感されうるだけでなく、その放棄可能性が担保されることによって、無理なく P4C 理論の中に位置付けられうることを明らかにした。

第 3 章では、P4C の歴史の比較的浅い日本において、「P4C 的な実践」の先駆者である林竹二の思想の独自性に注目した。林の実践においては、従来、ソクラテス的な探究の手法や、吟味、批判、浄化といった点に焦点が当てられてきた。他方で、林の実践を P4C と比較し関連付けたときに、そこにみえてくるのはむしろ、その「呼びかけ」の手法の独自性であり、「追いつめる」ことの意義であった。こうした林の理論と実践が、従来の P4C にみられるような論理的・批判的な言葉の吟味に重点をおいたものではない点で特異なものであり、むしろ「他者性との対峙」という点で、ピースタの「呼びかけ」と重なる点について指摘しつつも、それが第 1 章で検討した「薄い主体-性」を生じさせる構造と重なる点では異なることも本章は明らかにした。こうした林の理論と実践から、P4C が取り入れるべき点が多くあることを解き明かした点が本章の成果である。

第 4 章では、P4C とシティズンシップ教育の関係について紐解いた。従来、その密接な関係が指摘されてきたものの、P4C がどのような構想としての市民性/シティズンシップに寄与しうるのかについては理論家の間でも異なる見解がみられ、曖昧であった。そこで本章では、P4C において涵養される、リップマンが提出した「理性的であること」という市民性

が、「政治リテラシー」や「知識の習得」とはひとまず区別される、ミニマムなシティズンシップの構想であることを同定した。そして、P4C は、「理性的であること」それ自体や、そこに前提される諸価値それ自体をも問い直し、作り直していくことのできる「民主的な教育」として位置づけられるべきことを結論づけた。

第5章では、P4Cにおける「探究のコミュニティ」という構想が、どのように民主社会で機能しうるかを検討する議論の素地をつくるため、リップマンの背景にあるデューイの思想に遡り、公衆やコミュニティといったデモクラシーに関する概念について明らかにした。デューイはデモクラシーを一つの生活様式として捉え、それが共通の問題認識によって構成される公衆とコミュニティのダイナミクスによって適切に機能するものであると考えた。それは、何かを問題とみなすという意味では共通の問題認識に基づく集団である一方で、内部に多様な意見と観点を持ち、その差異や多様性を有用なものとみなす公衆によって維持されるべき「認識的デモクラシー」として再構成できるだけでなく、従来の批判に対して正当化可能なものであることも明らかになった。本章は、P4Cにおける探究のコミュニティがこうしたデモクラシーの構想において機能する、公衆の構想と重なり合う可能性について示唆した点で、研究意義を有する。また、補論では、こうしたデモクラシーの構想が、アートと美的経験という観点からアプローチ可能であることも示唆することができた。